事故事例から学ぶ
セーフティドライブ

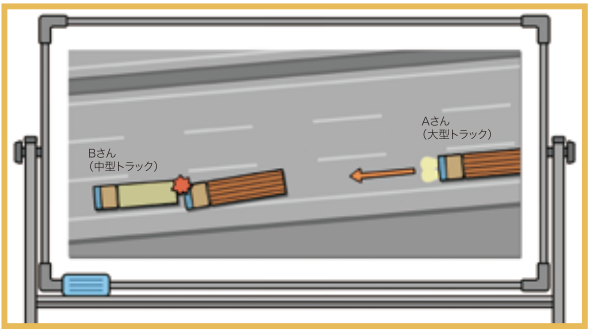
トラック同士の夜間追突事故

事故事例をもとに安全運転のポイントを紹介。社内での安全運転活動にお役立てください。

事故に至るまでの状況

Aさん（男性、大型トラック、40代）は、高速道路片側3車線の第一車線を制限速度の80キロ/時で走行していました。まだ夜明け前であたりはまっ暗。道は閑散としていて、自分の周りを走る車は見当たらない状況でした。すると突然、目の前に無灯火で停止しているBさんのトラック（男性、中型トラック、50代）を発見。急ブレーキをかけ、ハンドルを切って避けようとしたのですが間に合わずに追突してしまいました。この追突による衝撃で、Aさんの乗っている運転席は大きく変形してしまい、自身の脚にも重傷を負ってしまいました。

事故現場略図



事故の原因

この事故は、Bさんが無灯火で高速道路上の車線に停止しているのを、ロービームのままで走行していたAさんが見落としたために起きました。実はBさんは、事故の15分ほど前に別の追突事故を起こして動けなくなり、やむを得ず停車していました。Bさんは後続車に自車が停車しているのを知らせるべきでした。しかし変形した運転席に挟まれていて身動きが取れない状況で、さらに電気系統が切断されてしまい全灯火類が点かなくなり、後続車に知らせることができませんでした。Aさんが、ハイビームで走行してBさんを認めることができていれば、事故は避けられたかもしれません。

安全運転に向けて指導のポイント

交通が閑散とした高速道路を走行しているときは、つい気が緩みがちになります。特に夜間は速度感がマヒしてしまい、前方注視も怠りがちです。暗い前方にどのような危険が潜んでいるかわかりません！ 閑散とした道路でも、ハイビームを多用して前方の危険を早く見つけるよう心がけましょう。また万が一、道路上で止まるような事態に陥ったら、ハザードや発煙筒、停止表示板などで速やかに後続車に知らせましょう。

今月の安全メモ！
- 道が閑散としていても気を緩めず、夜間はハイビームを多用して前方の安全確認に努めよう！
- 道路上でのアクシデントは、ハザードや発煙筒、停止表示板などで速やかに後続車に知らせよう！

協力：（公財）交通事故総合分析センター